

PICK UP MOVIE

『オマージュ』

[2021年／韓国／韓国語／108分] G

出演：イ・ジョンウン、クォン・ヘヒョ、
タン・ジュンサン、イ・ジュシル、
キム・ホジョン

監督・脚本：シン・スウォン

©2021 JUNE FILM All Rights Reserved.

生きることへの 静かな讃歌



韓国で生まれたこの作品は、女性監督による女性たちの物語だが、女から女へのオマージュ（讃辞）の域を超え、すべての人の生を讃える佳作となっている。

主人公のジワンは女性映画監督。3作目を公開したところだがヒットにはほど遠く、次の作品を撮れるかも危ぶまれている。家には大学生の息子と夫がいて、家計費や家事分担のもめごともある。もめつつも卓抜なユーモアを繰り出す家族、一方でジワンの心に住みつくそこはかたない不安。仕事も家庭も持つ女性の生活や心象風景が、うまく表現されている。

そんなジワンにバイトが飛び込む。それは60年代に3本の映画を撮った女性監督ホン・ジェウオンの回顧上映のために、ジェウオンの監督作「女判事」の音声欠落部分にセリフを吹き込む仕事だ。シナリオ探しから始まって、関係者を訪ね歩き話を聞くうちに、ジワンは知らず知らずのめり込んでいく。男ばかりの映画の世界で、偏見にさらされ、時には蔑みの言葉まで投げかけられた女たち。彼女らは人一倍の仕事をこなし、その後は忘れ去られてしまった。彼女らの思いをしかと掴みたい、とジワンは思ったに違いない。

そんなジワンは思わぬ偶然から、「女判事」の検閲でカットされてしまったシーンを見つけ出す。傷だらけのプリントを、ジワンが元映画編集者の女性の家に持ち込む逸話は感動的だ。手間暇かけてつなぎ終えたシーンが物語る内容は深く重い。映画が厳しい検閲を受けていた時代に、その映画界の中でさらに困難な境遇に置かれていた女性たち。彼女らは差別されながらも誠実に仕事をこなし、心の底に夢を抱き続けた。そして今、彼女らは老いの身に鞭打って、次代にその夢を引き継ごうとする。

女から女へ贈られた励ましや敬意が、いつの間にか映画を通じて、映画の仕事に携わる人や観客にまで響き渡る讃歌となっている点が、この作品を傑作と呼びたい理由だ。韓国で、こういう厚みのある女性映画が作られるようになったのはなぜか。その背景についてここでは詳しく触れられない。ただ、韓国では#MeToo運動が、発祥の地・米国をしのぐほど激しく巻き起こったという。偽りの権威への強い異議申し立てがあったわけだ。けれど日本では、それはついに起きなかった。思えばこの差は大きいのかも知れない。

田村志津枝プロフィール：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。